
魔封郷

こじろ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔封郷

【Nコード】

N4722Q

【作者名】

こじろ

【あらすじ】

不思議な能力を持つ少年、堅は事故で別の世界に飛ばされてしまった。

元の世界に戻るためには、事故で壊してしまった鏡の破片を集めなければならぬ。

自らを『魔王』と名乗る少女と協力し、果たして下の世界に戻ることは出来るのか・・・？

鏡（前書き）

またーり更新

鏡

春の日差しが降り注ぐ田舎道を、一人でドライブしていた。

俺の愛車は中古だけど事故ることなく動いてくれるスクーターだ。

春先だがまだ冷たい風を一身に受け、身震いする。

だが、それがいい。

この日差しも、吹き付ける風も、嫌な事をすべて忘れさせてくれるほど心地の良いものだ。

この畑や木々に囲まれた長閑な道を走るということも、また、格別だった。

「~~~~」

無意識に鼻歌を歌う。

木々も風に揺られ川のせせらぎと共に音色を奏でる。

まるで、音楽祭のようだった。

俺、とみた朱鷺田 けん堅はもうすぐ高校三年生になる。

勉強や運動が好きというわけではないので成績は、いたって普通。

人見知りの激しい俺に彼女など作れるはずもなく、平々凡々と毎

日をダラダラと過ごしている普通の高校生だ。

髪をツンツンと逆立てる……のが理想だが、ボサボサでみっともない髪型になるので、整髪料などは何も使わず、少し長めくらいを維持している。

身体的に全く特徴のないことが、逆にコンプレックスでもある。

そんな俺だが、一つだけ、人には出来ないことができる。

『超集中』

俺は自分で勝手にそう名付けている能力だ。

この能力に気が付いたのは高校の入試の時だった。

問題を進めてゆくにつれ、周りの景色が薄れて行ったのだ。

次第に白が多くを占めるようになり、やがて一面の白が辺りを包み込んだ。

そこには天井も、床も、他の受験生の姿もなく、俺の座る席にあるもののみがポツンと置かれているだけだった。

始めは困惑したが、その空間に居ると意識がクリアになってプレッシャーから解放されたように体が軽くなるのだ。

そして、不思議と勉強したことがすらすらと引き出せるようになったのだ。

その時は、まるで問題用紙に答えがそのまま浮かんでいたように

も見えた。

それからと言うものの、コントロールは出来ないが、度々この世界に飛び込む事が出来るようになった。

例えば体育でバレーボールをした時。

スパイクを打とうと跳び上がった際にこの世界に飛び込んだ。

その世界は、やはり一面の白。

俺はボールと共に宙に浮いたまま。

そして、ボールから相手のコートまで、光の道が出来ていたのだ。

後はそこに通すように打つだけ。

打った瞬間に超集中は解け、ボールは光の道の軌道通りに相手のコートに吸い込まれ、叩き付けられる。

ふと気が付くとこの世界に飛び込んでいたりするので、時々困惑するが、次第とそれに慣れて行った。

この世界に入りこめるようになったのは 恐らく一度死にかけてからだと思う。

それは中学の卒業式を終え、母と家を目指していた時の事だった。

信号待ちをしていた俺と母に突然トラックのタイヤが猛スピードで突っ込んで来たのだ。

トラックの点検ミスと重量オーバーが原因だったそうだ。

母は咄嗟に俺を庇い、避けようとしたが、間に合わず、俺共々跳ね飛ばされた。

俺は落下時に頭を打ち、しばらく意識不明の状態が続いた。

医師が言うには、軽くても植物状態、脳死すら可能性はあったそう
うだ。

俺が今生きているのは奇跡に近いらしい。

そして、母は 死んだ。

母が庇ってクッションになってくれたから、今俺が生きている。

そこで受けた極限のストレスと恐怖からこの能力が発生したのではないか、と俺は思う。

……また暗いことを考えてしまった。

頭を振り、考えを振り払う。

少し休憩しようと思いい立ち、ブレーキをかけ……ようとしたんだ。

『スカッ』と言う音と軽い感触。

「へっ？」

二度、三度とブレーキをかける。

だが、反応は変わらない。

嫌な予感がして、ホース見ると……案の定オイルが漏れている。

そして、よそ見をしたせいか、変な方向に走っていたことに気がつかなかった。

ふと、前を見ると小さな社があった。

後一秒も経たない内に、確実にぶつかる。

「うわあああああ！！」

何にもならないと分かっているけど、つい悲鳴をあげてしまう。

そして

立て直そうとする努力も虚しく、俺は社に突撃してしまった。

階段に乗り上げ扉を突き破り豪快な破壊音と共に空中に投げ出される俺。

宙を舞う俺の目前にあった物は…一枚の鏡だった。

勿論、避ける術もなく、俺は鏡に衝突する。

鏡の割れる音、それから、地面にたたき付けられた。

息が詰まり、体中が痛いので何が何やら分からない。

意識だけはまだ残っているようだ。

手足の指に力を入れる。

僅かだが、ピクリピクリと動いてくれた。

ふと、どこからか唸り声のような音が聞こえた。

力を振り絞り、首を動かして音のする方向を見る。

すると、そこには……周りの闇よりさらに濃い漆黒の穴が空いていて、割れた鏡を吸い込んだ。

俺もじりじりと吸い込まれて行くのが分かる。

次第に吸引は強まり、俺は……穴に吸い込まれた。

そこで、ついに俺の意識は途絶えた。

出会い

恐らく、夢を見ている。

懐かしい母の顔。

手が頭に添えられる。

暖かい。

そして、心地よい。

不意に手の感触が消え、母は背を向けて歩いて行ってしまふ。

手を伸ばすが、届かない。

体を動かそうとしても、動かない。

母は闇の中に消えてしまった。

そこで、俺は 目を覚ました。

そこは、見慣れない場所だった。

床には赤い絨毯が敷き詰められ、天井には高そうなシャンデリアがいくつも存在し、まるで城のような、広々とした部屋の真ん中に倒れていた。

俺の側には、先程割ってしまった鏡の縁と大きめの破片が一枚あ

るのみだ。

体を起こそうと、力を入れる。

だが、あまりの痛みに、悶絶してしまった。

「あら、目覚めたのね」

突然、扉の開く音と共に声が聞こえた。

女性特有の透き通った高い声だ。

声から、大人であることは間違いないと思う。

コツ、コツと靴が床を叩く音、だんだんと近づいてくる。

助けられたようなので、礼を言おうと首だけその人物の方を向く。

まず、目に入ったのはブーツ。

そして足元まである黒と青のロングスカートと、女性が着るに
しては奇抜なデザインのコート。

……ほら、良く中世の王族が羽織っているようなの。あんな感じ
だ。

インナーは黒い毛皮で出来ているようなモコモコした服だった。

そこまで見て、何やら引っ掛かる。

俺が声から想像していたのは、身長が160センチ程のスラッと

したクールな女性だった。

だが、やけに低い。身長が。

顔を見た。これで全体像がわかった。

何と、幼い女の子だった。

髪は薄い金のセミロング。透き通るような瞳は青い色をしていた。

そして、あどけない顔立ち。

「……じろじろ見ないで頂戴。いやらしい」

「痛でででで!?!」

顔を踏まれた。

声は、やはり俺が聞いたものと同一だった。

「意識が戻ったのなら、聞きたい事があるのだけど」

「は、はい?」

その表情は、顔立ちに似合わず、艶っぽい。

「……鏡。これ、何があったの?」

「鏡?」

横をちらりと見る。

縁と破片が一枚。恐らくはこれのことだろう。

「事故って壊したんだ」

「……………」

少女は額を抑え、大きなため息をつく。

「もしかして、凄く大切な物だったり……………」

「……………ええ、あなたの命が何万個あるうが、引き換えられない程大事な代物よ」

さらりと酷い事を言いおろ、この小娘め。

「……………俺は、どうすれば……………」

「とりあえず死ね。」

……………と言いたい所だけでも、壊してしまった責任もとらずに殺すのは頂けないわね」

「……………」

少女。さらりと死ね、だの殺す、だの物騒な単語を並べてくださるこの

わりと本気で言ってるのか、正直逃げ出してしまうくらいこの威圧感がびしびし伝わる。

「……仕方ないわね。
貴方にはこの鏡の破片を全て集めて貰うわ」

無言で思慮していたと思いきや、こんな事を言い放った。

そういえば、鏡……。

何故破片が一枚だけしかないのだろうか。

「他の破片は……」

「無いわよ。」

恐らく、この大陸中にはらまかれているでしょうね」

「なっ……!?!?」

ここが日本なのかどうかは分からないが、たとえ日本だったとしても粉々に砕けた破片を全て集めるなんてとても出来やしない。

砂漠に米粒を落として、それを捜せと言われていたようなものだ。

「む……」

「無理、なんて言うてみなさい。貴方の首と胴体が離れ離れになるわよ」

慌てて口を噤む。

「何でそんなにバラバラに散らばったんだ……」

俺が絶望しながらボソリ、と呟くと、少々はある一カ所を指差した。

「貴方はあの窓を破って降ってきたのよ。」

きつと門の位置がとんでもない所だったのでしょう」

「あのう……話が見えないのですが……。」

そんな高い場所から落ちたのなら、俺は死んでるのでは？」

「ええ、死に掛けてたわよ。」

そうね、後数秒遅ければ死んでいたのではないかしら」

「……へ？」

自分の体をぺたぺたと触る。

怪我もなければ痛いところも無い。

「感謝なさい。私が治してあげたのだから」

「……。」

頭が混乱している。

「聞きたいことは山ほどある、って顔をしているわね」

「……そりゃそうさ」

混乱しすぎて、うまいこと物事を考えられない。

「良いわ、特別に答えてあげる。」

「ここは……そうね、『魔封郷』とでも名づけておこうかしら」

「まぶら……きょう？」

「そう。貴方たちが『魔物』と呼ぶものと人間が住む大陸よ」

「日本ではない……？」

「魔物ってなんなんだよ……」

「私の名はセラ。セラ・ベルゼブ。」

『魔王』よ

「俺の混乱などお構いなし、セラと名乗る少女は話を続ける。」

「……この鏡は、この世界と貴方がいた世界を繋げる門のような役割を果たしているの」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4722q/>

魔封郷

2011年10月8日16時04分発行